

令和5年度 第57回 中学生の「税についての作文」

町田市長賞

『「あたり前」を支える税金』

町田市立金井中学校 3学年 大川 葉月

最近、体育館に入ると、涼しいと感じるようになった。しかし、真夏の体育館に入って涼しいなど感じるはずはない。普通なら暑いと感じるはずである。それなのに涼しいと感じたのは、先日体育館に冷暖房がつけられたからである。これのおかげで、体育館での授業がかなり楽に受けられるようになった。これらのエアコンは、すべて税金によって設置されたのだと母が教えてくれた。また、私の所属している吹奏楽部では、何年かに一度新しい楽器を買うことができる。しかし、吹奏楽で使う楽器はどれも何十万円とする高額なものであり、部費だけでは払えない。そこで、市から配られる税金が使われているのだと知った。学校の備品である譜面台も、ピアノも教室の椅子や机も、私がよく読む図書室の本も、すべて税金によって維持できているものだということを知った。

私の中での税金とは、「払うもの」という印象が大きかった。消費税等として払っている場面はすぐに頭に思い浮かぶが、自分が税金を使ったサービスを受け取っているという感覚があまりなかったからである。しかし、もしも今税金がこの世からなくなったら、私達は真夏の体育館で蒸し焼きの様に暑い中、授業を受けなければならなくなる。吹奏楽部の楽器が壊れても、新しいものを買うどころか修理すらでき

なくなってしまう。すると、演奏に支障が出てしまう。学校の机や椅子が壊れても替えられないと、充分に授業を受けられなくなってしまふ。図書室の本がボロボロになっても新しいものに替えられないし、古すぎて読めなくなり、捨ててしまふと図書室からどんどん本が少なくなっていくってしまう。

私は今まで、税金を使ったサービスを受けているという感覚は持てなかった。しかし、私が今まで「あたり前」だと思っていたことは、すべて税金に支えられていたものだということを知った。私達が今感じている「あたり前」は、日本全国の様々な人が少しずつ税金を負担してできているものだ。これからは、自分は常に、周りから支えられて生きていくという認識を持てるようにしたい。そして、私が大人になって、今よりも多くの税を納める立場になったら、今度は自分が、自分と誰かの「あたり前」を支えていきたいと思う。